

初冬まきで 春まき小麦の 産地化を目指そう!



平成19年10月

北海道立上川農業試験場

1 はじめに

上川・留萌地域は、水稻を基幹に小麦・大豆を中心とした経営が行われてきました。しかし、平成19年より品目横断的経営安定政策が導入された結果、小麦の過去実績が非常に低い当地域では、小麦の収益性が急激に悪化しています。そのため、収量の向上と品質の安定化が急務となっています。

こうした状況の打開策として、「春まき小麦の初冬まき栽培」へのチャレンジがあります。

需要の多いパン用や中華めん用には内麦の供給はほとんどできていないため、春まき小麦の購入希望数量は常に供給量を上回っている現状があります。そのため、入札価格は値上がりが続け、価格が秋まき小麦より有利になっています(図1)。

上川・留萌地域の春まき小麦面積は全道の32%を占め、全道一の作付け面積を誇っていることから、ロットをまとめ品質を均一化することによって産地化を図ることができます(図2)。

「春まき小麦の初冬まき栽培」でブランド化を目指しませんか！

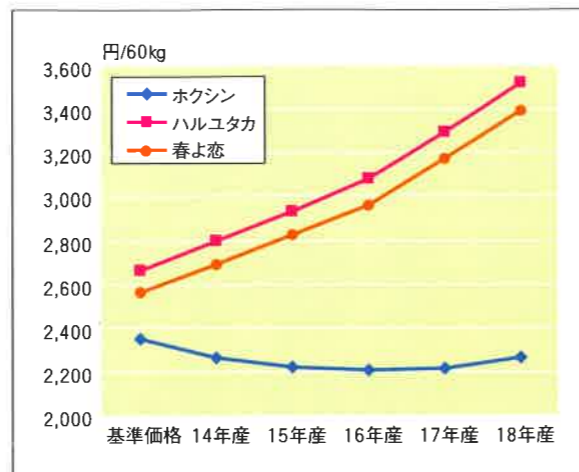


図1 小麦指標価格の推移



図2 支庁別春まき小麦面積 (平成18年 農林水産統計)

2 初冬まき栽培のメリット

- ① 実需者ニーズに対応した「売れる小麦づくり」ができる
- ② 前作を選ばないため導入しやすく、田畑輪換や輪作体系を組みやすい
- ③ 生育期間が長くなり、春まき栽培以上の収量が期待できる
- ④ 春まき栽培より成熟期が早まり、雨害による品質低下を回避できる
- ⑤ 病虫害被害(赤かび病・ムギキモグリバエ)が軽減される
- ⑥ 春先の作業競合が回避される



図3 輪作体系のモデルパターン

3 初冬まき栽培成功の五ヶ条 (越冬前の管理)

ほ場の準備

融雪時に滞水するほ場では、著しく越冬率が低下するのでほ場の選定と排水対策が重要です。

- ① 排水の悪いほ場は選定しない
- ② 心土破碎等により透排水性を改善する(秋施工・雪上心破)
- ③ 額縁明渠の施工

耕起・碎土

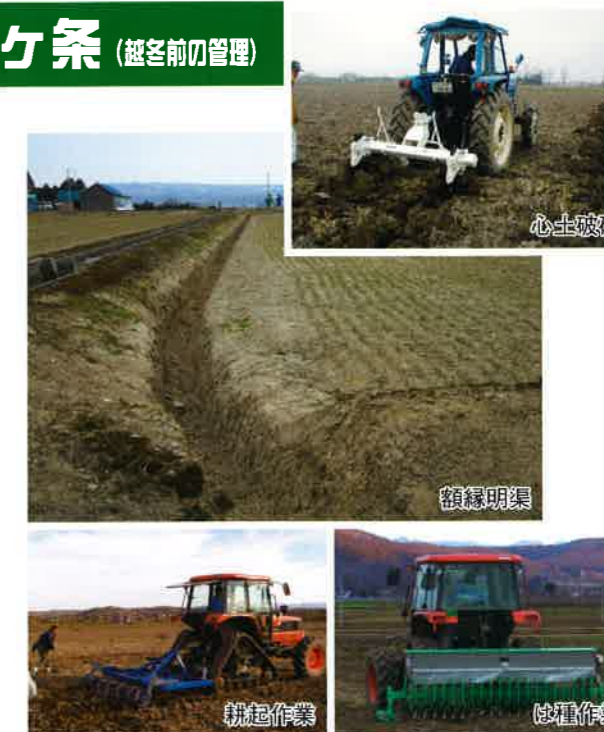
練り返しや碎土が細かすぎると、越冬後に土壌が固結し生育が劣るので、なるべく乾燥したほ場条件で作業を行う。

種子消毒

紅色雪腐病に効果のある薬剤で種子消毒を行う。

適期は種

は種後の積算気温が117℃を超えると種子が発芽を始めるので、「地域の平年根雪始の20~25日前から根雪始まで」がおおよその適期となる。



は種量

- ① 越冬個体数が100本/㎡以下だと減収程度が大きくなる
- ② 越冬個体数150~200本/㎡で安定した収量が得られる
- ③ 越冬率を考慮すると、は種量は400~500粒/㎡程度(18~20kg/10a)必要である

4 初冬まき栽培の失敗例

根雪前に出芽 は種が早すぎると、根雪前に出芽して越冬中に枯死する

滞水

小麦の根は過湿に弱く、融雪水が滞水すると酸素不足で枯死する



土壌の練り返し

土壌を練り返すと、排水が不良になり越冬性が低下する



土壌凍結

融雪を促進しすぎると一度融けた水分が凍結し、凍上害が発生する恐れがある



雑草害

越冬性が悪く茎数不足で裸地化したほ場、土壌pHが低く生育が不良なほ場で被害を受けやすい



「春よ恋」、初冬まきへチャレンジ

当社では十数年前より、パンを焼ける内麦として「ハルユタカ」の供給をおこなってきました。しかし、秋まき小麦に比べた収量水準の低さや、収穫時の降雨による穂発芽被害の発生のもとでなかなか作付けが伸びません。このため、安定供給を求めお客様に対して、「10月にならないとどの程度お届けできるかわかりません」という様な対応しかできませんでした。

2000年には「ハルユタカ」が大不作となり、新品種の登場が待ち望まれており、2001年に多収(春まきとして)、良質(製パン性)、耐病性、低アミロ耐性、を備えた「春よ恋」の作付けが開始されました。当社では数年前より実需として評価をさせてもらい非常に期待の大きい品種であることは確認できていましたので、あとは作付け面積の拡大による増産のみとなりました。2003年約5,000ha、2006年には8,600haとなり収量においても26,000tを越え全国的にみても春まき小麦、パン用として広く認知され現在に至っています。需要については特性を生かしてパン用のみでなく中華麺、手延べ、などを始めとして麺のジャンルにも広がりを見せています。

今後の課題として、価格(世界一高価な麦)の問題はさておき、「春よ恋」の育種段階の特性を維持し、安定した品質の小麦の生産拡大が重要となります。希少価値を売りとするのではなく、増量材として利用するのでもなく、普通に当たり前の商品として「地域の人」、「北海道の人」、「日本人」が手にとっていただけるよう、初冬まきの拡大に期待しているところです。



横山製粉株式会社

総合開発本部長
事業推進室室長 加藤 啓治

「安定収量を目指した春まき小麦・初冬まき栽培技術の定着と普及」プロジェクトチーム構成メンバー

「平成19年度産学官連携経営革新技術普及強化促進事業」より

- 上川農業試験場
- 上川支庁農務課
- 留萌支庁農務課
- 上川農業改良普及センター
- 留萌農業改良普及センター
- 横山製粉株式会社
- 株式会社ホクエイ
- J A北海道中央会
- ホクレン
- ホクレン農業総合研究所
- 北海道大学農学部
- 名寄市
- J A道北なよろ
- 苫前町
- J A 苫前町